



毎月2回10日・25日発行
 発行所 秋田県北秋田郡合川町役場
 編集責任者 広報係 杉淵佐一郎
 (合川町役場総務課) TEL合川4番
 (1回発行部数2,400)

産業経済特集に寄す

新しい町づくりのために

町長 畠山義郎



合川町となつてから三年余、町経済課で「産業経済特集」の広報を町民に配付する計画がすめられ、それが実現のはこびとなつたことは喜びにたえないところであります。何故ならば、新町の事務機構が充分整わない状態と経済課職員と町民との顔が互いによく知られておられない環境でありながら、この間に行われて来た仕事を公開し、今後当町の産業経済の動向がどうあらなければならぬかを批判し、その進路を探究するための絶好の機会を町民各位に与えることができたのであります。町民各位は町のやり方を、良きにつけ悪きにつけ、充分に批判し、これからの本町産業経済の発展はどうかあるべきかを世論として盛りあげて下さるならば、経済課職員はもちろん、私も町政を担当する者の鞭撻となると思つて、真に町民の意志を尊重した産業経済政策の確立が具現する動機となると思つてあります。

着々進む

新農村建設の事業

昭和三十年度の総合助成地域農村振興協議会を設ける基幹となるべき事業に引続き昭和三十一年置き委員四十六人を委嘱し、項をとりあげて農民の欲求から農山漁村振興特別助成の意見をきくとも、漸次あたらしい農村建設の指針を定め、わが町に事務局を設置し、事務局長村型態へ導くための五カ年計画を定め、松橋昭一、のちに柴田勝にわたる諸施策を計画し、その事業推進のため「合川直」し、わが町の農業経営の承認をうけ事業を実施し

五カ年計画のうち二カ年つである。は国庫補助及び融資をうけ、また第三年次から五年次までは融資事業が主体となり、第三年次にあたる今年度から融資事業が進められることになった。前二カ年に実施した事業は別表のとおりであり、これらの事業必ずしも全部が全部成功したもののみとはいへないが、草資源開発整備事業(兼沢地内、開放地十五町歩、展示牧野五町歩、牧道一、〇二三米

土屋五〇〇米、外に自力に内動力耕転機一台、サイ三町歩)等は本格的な事業。また融資事業では暗渠排水による牧野改良六町歩)や飼レージンカウンター一台、サイ型態を整えており今後の進水(兼沢地内五町歩)等の料自給促進施設(木戸石地鉄製型榨一台、展示牧野展が大いに注目されている低位生産地帯の土地改良事業

8~10月の産業経済行事予定

(8月)

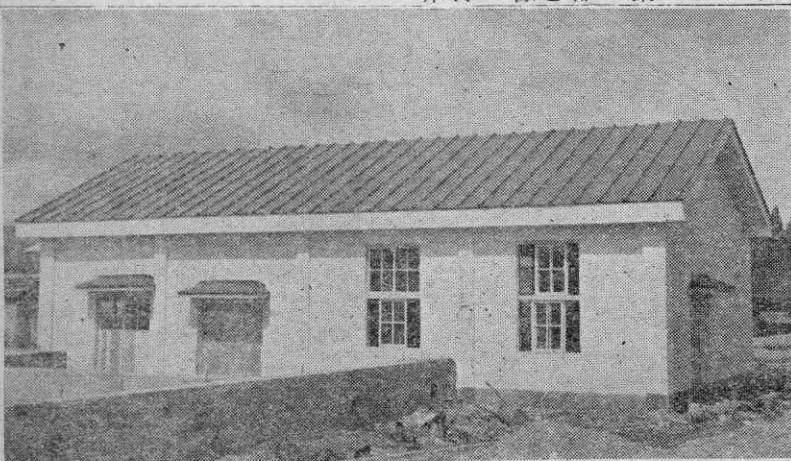
- ◎本田管理及び病害虫防除
- ◎秋蒔蔬菜播種、管理指導
- ◎水稲、大豆採種圃の管理指導
- ◎生活改善グループの指導
- ◎通し苗代稲倒伏防止指導
- ◎農村青年研修生派遣
- ◎土壌調査結果発表
- ◎サイロの設置指導
- ◎酪農座談会◎牧草畑の管理指導

(9月)

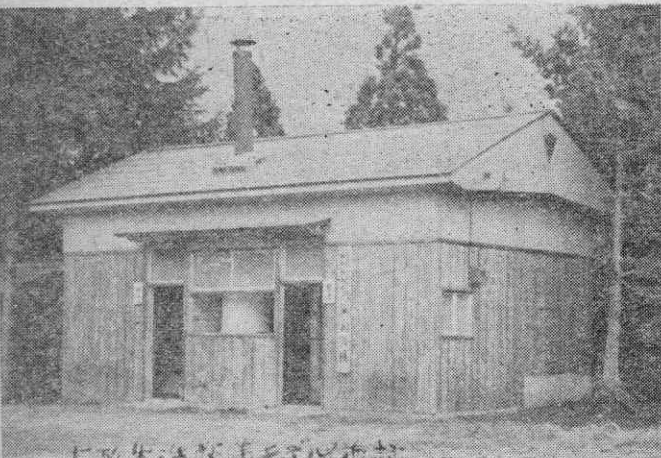
- ◎水田の管理指導
- ◎水稲及び大豆採種圃は審査
- ◎水田裏作の実地指導
- ◎農村青年研修生派遣
- ◎米多収穫競争会(坪刈)
- ◎作況調査
- ◎サイロ詰込み講習会
- ◎酪農飼育管理及び実地指導

(10月)

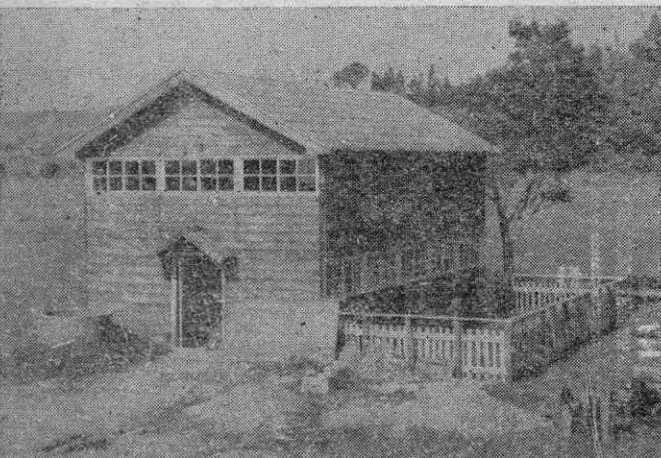
- ◎水田裏作実地指導
- ◎水稲、大豆採種圃の管理指導及び刈取り
- ◎米多収穫競争会(坪刈)
- ◎農業簿記の記帳指導
- ◎土壌調査の実施
- ◎秋蒔牧草播種の実地指導
- ◎米穀売渡しの指導
- ◎乳牛の空胎防止指導
- ◎秋季こうし市場出陳指導
- ◎34年度乳牛導入交渉
- ◎サイロの詰込み指導



【共同集荷貯蔵所(駅前)】



【生活改善モデル施設(上杉)】



【自給養豚施設(三木田)】

新農村建設事業によつてできた施設

昭和31年度補助単独事業

事業種目	事業主任	事業費	国庫補助	地元負担
種粉催芽所	李岱農事実践班	165	82	83
同	杉山田同	165	82	83
同	東根田同	165	82	83
同	増沢同	165	82	83
研修キャンプ施設	合川町役場	465	232	233
共同集荷貯蔵所	上大野農協	768	384	384
共同作業所	新田目農事実践班	592	296	296
同	八幡岱農事研究会	518	259	259
畑作経営改善モデル施設	杉山田農事研究会	150	75	75
生活改善展示施設	上杉農事実践班	447	223	224
同	新田目保坂高雄	261	130	131
共同育すう所	合川養鶏組合	630	315	315
有畜営農改善モデル施設	下小阿仁農協	822	378	444
計		5,331	2,620	2,711

融資単独事業

事業種目	事業主体	事業費	国庫融資額	地元負担
土地改良事業(水門)	道城部落	145	104	41
同(掛樋)	同	166	128	38
動力耕転機	下小阿仁農協	983	786	197
同	落合農協	579	463	116
計		1,873	1,481	392

昭和32年度特別助成事業 補助単独事業

事業種目	事業主体	事業費	国庫補助	地元負担	融資
草資源開発整備事業	鎌沢農事実践班	1,869	520	399	950
水田裏作推進施設	三木田農事研究会	334	143	191	
飼料自給推進施設	木戸石同	580	258	322	
共同作業所	三木田同	814	326	488	
種粉催芽所	同農事実践班	225	108	117	
同	三里同	225	108	117	
同	鎌沢同	225	108	117	
計		4,272	1,088	1,117	950

融資単独事業

事業種目	事業主体	事業費	国庫融資額	地元負担
土地改良事業(水路)	川井農事実践班	598	470	128
同(農道)	芹沢同	478	380	98
同(暗渠)	金沢同	720	540	180
草資源開発整備事業	金沢同		950	
計		1,799	2,340	406

たばこは
合川町内で
 買いましょう

業の成績も期待できるものとみられている。
産業経済特集
 主な記事
 ◎新農村建設事業の内容
 ◎農家経済の分析
 ◎酪農経営と将来性
 ◎地域酪農振興対策
 ◎飼料作物の考え方
 ◎乳の上手な搾り方
 ◎農林金融の手引

農家経済の分せき

木村清造

はじめに

われわれ農家は主として農業所得によって一家の生計を営んでいるが、しかし農家自身が農家経済の構造、農業経営、農家生活等の諸問題を深く掘り下げて検討したことがあるだろうか？

以下に私が掲げる数字は県内における経済統計調査の資料によつたものであるが、われわれ農家経済の実際もこの統計に示す数字と大同小異であり水稲単作地帯における農業経営の現実の姿を如実に現わしているものと思つてゐる。

あえて大それた題名？「農家経済の分析」としてはみたものの、いくばくかでも合理的な農家経済のあり方に資することができれば幸いである。

農家経済とは

農家経済は農家収入と農家支出とによって構成されているが、その関係を示す次の式になる。

農家収入＝農業所得＋農外所得＋財産収入
農家支出＝農業支出＋農外支出

農家経済の構造

農家経済の構造というこゝろに於いて県内における経済統計の数字(平均値)を用いて少く述べてみることにしよう。

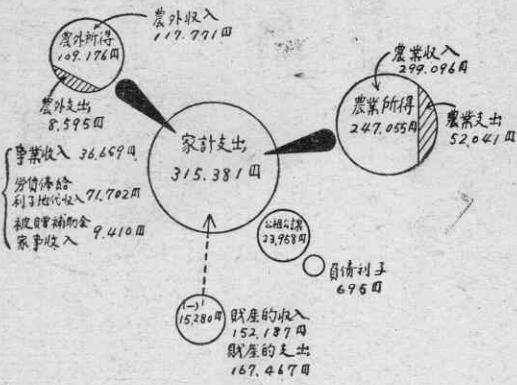
農家収入の内容

ここでまたひとつの県の統計にあらわれた農家の収入を基にして農家収入の細部に於いてふれてみることにしよう。

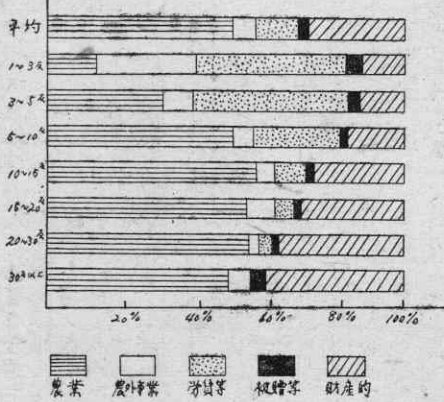
ある農家の年収が五六九

〇五四円あつたとしてその内訳は農業収入二九七〇円、雑収入九〇〇円、労賃等収入三六〇円、地代等の収入七一〇円、(林業一八、七〇〇円、(労賃、俸給手当

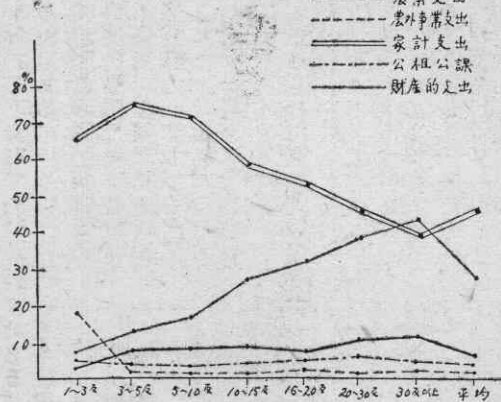
第1表 農家経済の構造



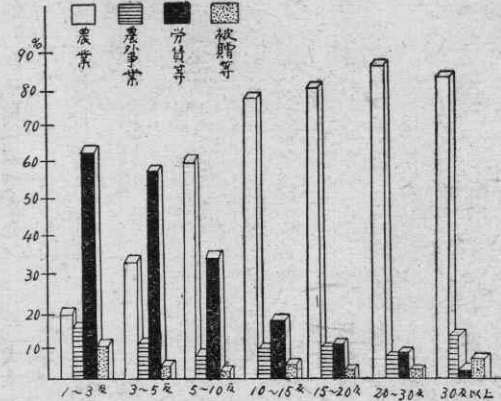
第2表 農家総収入の内容



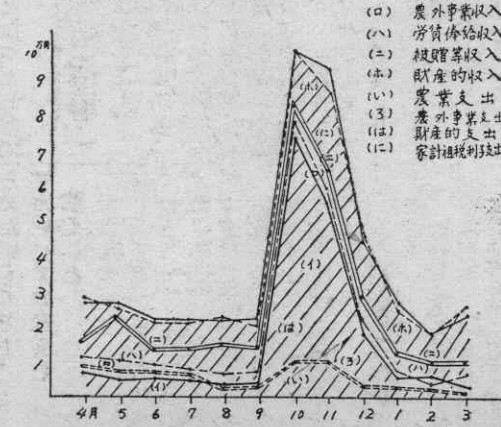
第3表 農家支出の内容(経営規模別)



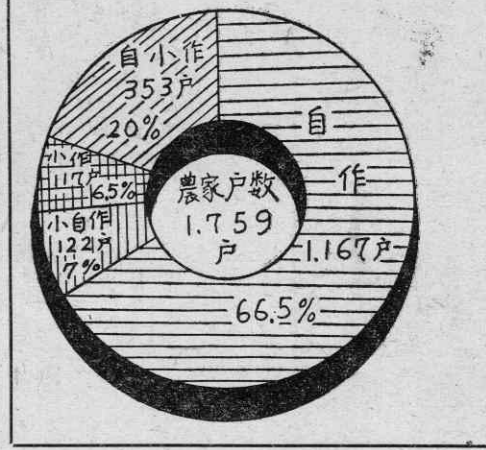
第4表 農家所得の内容(経営規模別)



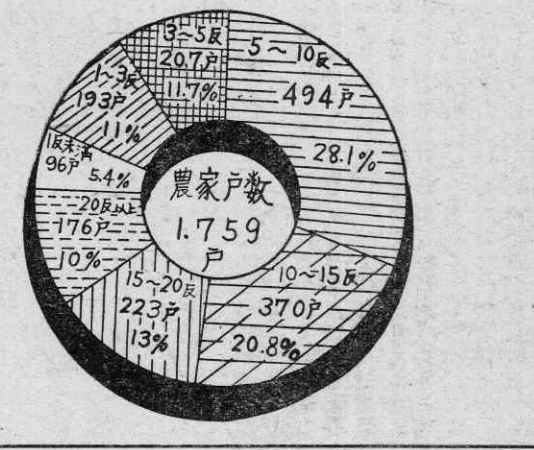
第5表 月別現金収支



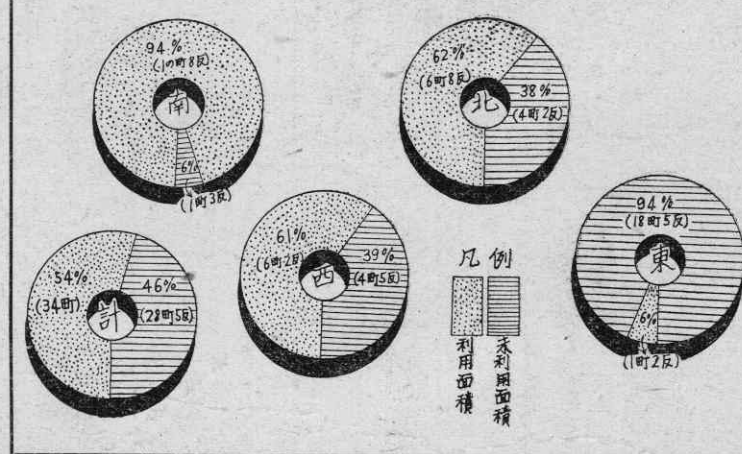
自小作別農家数(合川町)



経営耕地面積広狭別農家数(合川町)



苗代跡利用(水稲植付)地区別比較表



農家所得

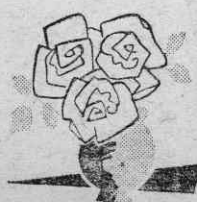
今まで農家経済全体の動きをごく簡単に述べてきたのであるが、これらの農家では生活を如何にして維持しているのだろうか？これを顧みるためには農業所得を顧みる必要が生じてくるわけである。

農家支出

農家の支出には「家計収出」と「農業支出」があるが、前者は主として家族数に、後者は経営規模によつて各々左右されるものである。

農家の月別収支状況

最後に第五表として一年間における農家の月別収支の状況を参考にしていただきたい。米単作地帯である故に収入が一定の時期(秋季)に集中しているのは否めないが、それと比較して公租公課が割合に大きいようである。第三表に県の統計による「農家支出の内容」をとりあげてみたが、家計支出と農業支出が経営規模の増大するに於いて反比例していることに注意してほしい(筆者「経済課主事」)



酪農振興は

まず飼料作物から

飼料作物はその種類が極めて多く、世界中で栽培されているものをあげると三百種にもなるが、酪農を経営していく上になくなくてはならないものとされている。

係ではこの飼料作物について、米代中流集約酪農指導所（鷹巣町）の佐藤信夫技師から「飼料作物の考え方」と題する原稿をいただいたので、現在酪農をやっている人、及びこれから酪農を志している人たちのために紹介することとした。

飼料作物の考え方

世界中には約三〇〇〇種に及ぶ飼料作物が栽培されているが、そのうち、わが国に適合しているものは約三〇〇〜四〇〇種類である。

これらの飼料作物を實際に栽培するに当っては、何よりも作物そのものの性質をよく知っておくことが大切である。

また、飼料作物は次の四つの条件をそなえたものでなければならぬことも忘れてはならぬことの一つである。

四つの条件というものは

- 一、家畜が喜んで食べ、消化しやすく且つ栄養が豊富であること。
二、収量が多く、再生力が盛んで、比較的粗雑な栽培でも作物本来の能力をあらわすことができること。
三、いかなる気候、土壌にもよく適すること。
四、費用と労力があまりかからないこと。

などがあげられている。ところが、このように四拍子そろった飼料作物というものは、そうザラにあるものでなく、おのおの一長一短があるのだ、これらの欠点を補うがため、これらを組合せると、だいたい次のように方法や技術でカバーしていかねばならぬということになる。以下にその方法あるいは技術の一端をみなさんに紹介しよう。

土地に適した作物を

一般に飼料作物は強い性質をもっているといわれていて、作物本来の性質を發揮するのは、適した土地においてである。このため、今までの経験を基にして、いろいろと組入れするが、または指導機関の指導を受けるなど慎重を期さなければならぬ。

また、飼料作物は次の四つの条件をそなえたものでなければならぬことも忘れてはならぬことの一つである。

土地に適した作物を選ぶと同時に優良な飼料作物に適切な土地を与えてやることも大切である。

いろいろな環境や土壌の改良等によつて作物の収量を増したり、今まで利用できなかった優良な飼料を生産することに大きな期待をもつことができるわけである。

数多くの種類をつくること
飼料作物には、それぞれ一長一短があるので、これらを補うために種類を組合せて栽培することは非常に有利である。

ではどのように組合せるのか、おのおの一長一短があるのだ、これらを組合せると、だいたい次のように方法や技術でカバーしていかねばならぬということになる。

以下にその方法あるいは技術の一端をみなさんに紹介しよう。

飼料作物栽培組合せ表

Table with columns for crop name, sowing period, and harvest period, divided into '前作' (Previous crop) and '後作' (Next crop).

未利用の土地の高

飼料作物の栽培にあたっては、良い土地に作付するにこだわらないで、いわずに熟した土地にのみ拘泥することはいろいろな関係でなかなかむずかしいのが飼料作物栽培の現状のようである。

そこでわれわれは目を転じて、作物のあまり良く出来なない土地や未利用の土地にこれらの作物をとり入れる必要が生じてくる。

未利用、未開発の土地に適切な飼料作物を組入れ、効果的に飼料を生産することこそ酪農振興上極めて重要な課題であると思ふ。

栽培には十分な作付計画を立てて
限られた面積の飼料畑から栄養価の高い飼料作物を多くあげ、飼育している家畜が年中青々とした飼料をとるようになるには、しかも畑の地力を培養するために計画的な作付が必要である。

作付計画を立てるには、気候、土質、経営内容、経済的環境等を充分考慮しなければならぬ。

つまり飼料作物についての可能な反当収量、供給量、収穫までの所要日数、貯蔵力、含有栄養価、畑地における輪作の方法等をよく研究しなければならぬこととなるのである。

当地方に適している

品種のなかから
では今まで述べてきたこととがらを念頭に置いて、当地方に適した品種をあげてみると、次のような品種を栽培した方が有利のようである。

乳を上手に搾れるか

乳牛の飼育技術のなかで搾乳（乳をしぼること）ほどむずかしいものはない。いくら泌乳能力の高い牛でも搾乳が下手であるとその能力を充分にあらわすことが出来ぬばかりか逆に乳房炎という病気に罹らせて、せつかくの牛も台なしというこに陥らぬとも限らない。

係では大野俗伝習農場の菊地技師に「上手な搾乳の方法」をいろいろときいてみた。

自分の牛の乳量型をよく知ること
一般に酪農家は一日の搾乳量の多いことばかり重んじておき過ぎているようであるが、まず何よりも、その乳牛の一乳期（三〇〇日）の平均した乳量を出すような飼養管理をするように経営することが必要である。

また乳牛の血統によつて分娩後三〇〜四〇日ぐらいで最高乳量に達する「最高型」と六〇〜八〇日位で自力を維持する「持続型」があることを知っておかねければならぬ。

この型を知るためには毎日の搾乳量を記録してグラフにあらわしてみることが非常に役立つことになる。

搾乳の準備
搾乳者は清潔を保つため白衣、前掛あるいは清潔な作業衣を着用、頭には帽子か手ぬぐいをかぶり搾乳直前に四〇度ぐらゐの湯でよく乳房をふくようにする。

乳牛飼育管理の一日

小笠原三四治君の場合
小笠原三四治（みよし）君は当町増沢に居住する青年である。酪農に熱心な彼は、酪農牛をつけ加えた程度のもので、酪農を通じてのあたらしい運動が、乳牛を飼つてみることが、時間的観念が要求されていり、今日までの一般酪農経営の仕組が変えられ、農民の協同体制が痛感されることなどから、あたらしい町作りを通じての農民層の確立という大きな希望を抱いている。

酪農振興標語

入選者さま
町酪農建設委員会では、さきに町内より広く酪農振興に関する標語を募集して、応募総数数百点に達したが、このほど審査を行った結果次のとおりに入選者を選定した。

酪農振興標語
西中二B 成田 満朗
西中二B 安部 久雄
西中三B 福岡 健夫

生活は酪農で
酪農は先ずよい牧草から

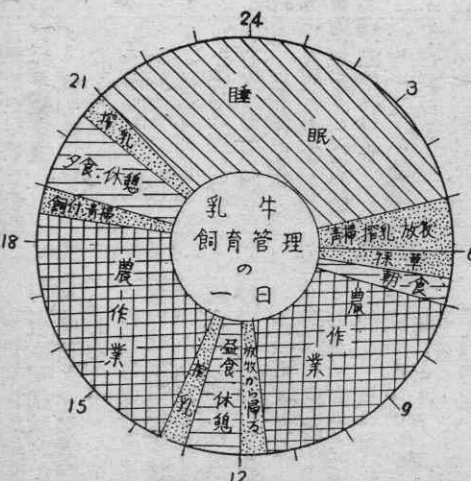
酪農は先ずよい牧草から

酪農は先ずよい牧草から

酪農は先ずよい牧草から

酪農は先ずよい牧草から

酪農は先ずよい牧草から



乳牛1頭、初産後2月、乳量4斗、搾乳3回

農林金融の手引

農業改善に必要な

資金の調達はどうして

経済力の弱い我が国の農村では農民が生産力の発展と経営の安定をめざし

草地改良の資金

草地改良の資金には融資と補助の二つがあり、次のようになっている。

- ① 農林漁業資金
② 貸付金の種類
③ 貸付対象事業
④ 貸付の相手方
⑤ 利率
⑥ 償還期限
⑦ 据置期間
⑧ 災害及び一般補助

家畜導入資金

一、有畜農家創設資金制度
二、家畜導入の補助
三、家畜の種類
四、標準単価

キリ栽培のしおり

第九 近藤技師にさく

「女の子が生まれたらキリの東北地方の寒冷地に栽培さ
木を植えよ」といわれてきたものが強く光沢があ
るが、キリはわが国の樹木好評である。

乳牛(五分五厘) その他(六分五厘)
(註) ① 本町の場合は集約酪農計画にもとづいて乳牛の導入資金が優先的に取扱われ、昭和三十三年度の実績をみると一頭につき四万二千円の融資がなされた。

大野台開発に期待
特定開発地域に指定される
農林省では、去る十七日で行われて来たものを、さ
「特定農地開発地域」として事業効果を集約的に実
施するのがわが国、今回の指定で各工事も急速に
は本町及び森吉、鷹巣三町進行するものとみられてい
る。

農業施設資金
農業が農業経営の改善を
図るための施設をする場合
に、農協を通じて信連より
その事業費の八割以内の施
設資金を借りることができ
る。

農薬による事故をなくしよう
「コルタル」または「ツギキロー」または「ツギキロー」を塗つて病菌の侵入を防ぐこと

第三期農業実習生長野県へ
「さく」は四名
長野県諏訪郡茅野町北久保 矢島一郎

町経済課
事務分担
(主任事務) (職氏名)
柴田勝直

キリ栽培のしおり (續)
ハ、節の数が多いこと。
ニ、根に傷がなく細根が多いこと。
ホ、芽かき
ハ、肥料の要求度が非常に高く、取扱いを間違えて人命をなくした事故などが全国的に非常に多
いので、関係各機関では農
薬の取扱や使用については
次のごとを充分守り、事故
を起さないようにと望んで
いる。

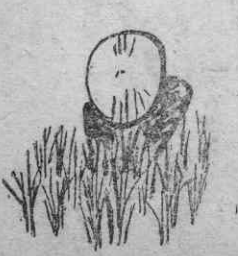
大野台開発に期待 (續)
大野台の面積は約四千二百町歩、これが本指定によ
つて全部開墾による開墾を
「機械開墾」として、開拓
を早めることが望まれている。

農業施設資金 (續)
建設費(一馬力)三万五千
円
建設費(二馬力)三万五千
円
建設費(三馬力)三万五千
円

農薬による事故をなくしよう (續)
「ツギキロー」または「ツギキロー」を塗つて病菌の侵入を防ぐこと
「コルタル」または「ツギキロー」を塗つて病菌の侵入を防ぐこと

第三期農業実習生長野県へ (續)
「さく」は四名
長野県諏訪郡茅野町北久保 矢島一郎
松橋修二郎
同茅野町田沢 武居重美
同茅野町久保 久保田智晴
同茅野町田沢 藤森祐八

町経済課事務分担
(主任事務) (職氏名)
柴田勝直
庶務、農政 木村清造
林業、副業 主事 木村清造
商工、観光 主事 木村清造
失対、登記 主事 松田芳之助
計画、都市 主事 山田卯一郎
土地改良 主事 山田卯一郎
産新、新築 主事 山田卯一郎
米穀、穀類 主事 山田卯一郎
酪農、技術員 斎藤信一
土木、建設 技術員 工藤昌
築、都市 技術員 工藤昌
計画、測量 技術員 加賀屋栄悦
現場監督 技術員 加賀屋栄悦
農業技術、技術員 木村仁兵衛
同、酪農、技術員 工藤博



小畑知事も善處を約束

酪農に力入れる鎌沢部落

鎌の沢部落は酪農に熱心な部落である。部落こそつてといつてもよいほどの力の入れようである。去る四日小畑知事は、森吉町からの帰途同部落の野改良展示圃を視察した後、同部落民とひざをつきあわせて話しあつたが、牧この話し合ひで、知事も今後の酪農振興のために最大の援助を惜まないと約束した。

鎌の沢部落は戸数約百戸非常に困難だったので部落ローバーなどの牧草が七、八で昔から特殊な性格を持つ民が繰出で切株を人手で掘八寸の背丈になつて高原のたところである。一戸平均より努力がなすけられた風になびながら、同地を地しかなない零細農家が多くの農指導所が設けられ、同所とさらに十五町歩をあらたのもその特徴の一つであるといわれている。

しかし、部落所有の不動産(田、山林、採草地)はばくだいなので、これは昔からの指導者たちの意見でそうなつていられるものなうが、農家は営林署などの山仕事に従事して生計をなしたたせ共有財産に手をつけずにはふやしていこうといふ方針にもついていたものらしい。

戦後は山仕事も次第に減少し、さらに機械力も取り入れられて、山仕事に依存していた同部落もこの余波をうけて、労働力がダブつきはじめ部落対個人の争いがしばしば見られるようになった。

酪農……ということばがはやりはじめたのはこの頃であつた。苦しい生活から何とかしてぬけ出そうとしていた部落ではこの酪農という未知のものにさつきとびつき、部落民を集めて再三にわたる総会を開いたうえこの事業をおし進めることをきめた。当時の指導者は今は故人となられた福田庄之助氏であつた。

福田氏なきあとには現在の部落代表福田宮松氏が総代におされ、昨年の九月にまず、酪農の第一歩である飼料対策と牧野改良に着手したが、そのときはまだ酪農指導所というものができておらず、機械力を頼むにも

飼料は対策ができて、牛の導入をどうするか、個人が貧乏では自分の生活を維持していかだけがいけないで牛まで買ふ余裕などなかなかという農家が多いのである。現在の制度による融資(標準価格六万円うち七割融資)では満足な牛は買えそうもないと農家はなげいている。実際に導入したい牛は三ヶ月程度の妊中(ハラミ中)が理想とされこれだとすぐ乳しほりできるわけだが、十四、五万円という価格では自己資金の捻出で手をあげてしまふという事だ。また仔牛を買ふにしても乳を出さぬうちに償還期に入りこれで



【写真=福田総代(△印)から説明をきく小畑知事(○印)】

農機具研究グループの結成をしよう

県でも積極的に指導援助

県内の農家が購入する農機具の総額は一カ年間に十数億円(農政課調べ)にもなつて、その需用も年々多くなつていけるが、そのわりに農機具に対する知識や能率的な使用のしかたが研究されていらないようである。

公民館から

お盆の行事は

新暦の八月で行いましょう

新暦行事助行運動の一つとして、お盆行事を一月おくれの八月にするようおすすしませようという傾向になつてきております。

旧暦は月齢を基準として暦日を算定したもので、その年によつては早かつたりまた遅くなつたりもします。新旧まちまちにお盆をしますと墓参りに来るにも二重に日をつぶすことになり、時間的、経済的、消費の面でも無駄が多くなります。

新生活運動が活発化するにつれて、わが合川町のみなならず、

皆さんの声をお聞かせ下さい

「広報あいかわ」は去る三十年六月第一号を発行以来満三年目を迎えました。ことしもまた月二回の発行で、町政全般のことについて紙面の許すかぎり町政を報道し、みなさんのご批判、ご協力を仰ぎたいと思つています。そのためには、「読みやすく判りやすい」広報紙上で、匿名は御自由です。

年の実績とらみあわせて、売渡予約期間は七月八日から八月十五日まで、予約食糧給付計画に努力するとともに、予約制度の崩れによる農家自身の経済的な不利を防ぐためであるから農家は一俵でも多く政府に売渡すようにと協力を望んでいられる。

目標に対し九七セント

米予約売渡中間集計

別項のとおり本年産米の予約実績は、去る八月八日から八月十五日まで受付中であるが、食糧事務所合川出張所できりまとめた町内各地区の予約状況(七月二十日現在)は次のとおりとなつていられる。

地区	本年目標	予約実績	率
東地区	六、三二〇石	六、一〇〇石	九六、五二%
西地区	二、九二〇石	二、八〇〇石	九六、一五%
南地区	六、〇〇〇石	五、七八三石	九六、三九%
北地区	二、九六〇石	二、八九五石	九六、一〇%
町合計	一八、二〇〇石	一七、五九六石	九六、六八%

今年度の米価

石一萬三千二十三圓

今年度の米価と米の集荷方針がきまつた。米価は石当り一〇、三三三円、昨年にくらべ五〇銭高となつていられる。

全国的集荷目標は二、九六六石、このうち秋田県は百九十一万一千三百石、またわが合川町の目標は一萬八千二百石となつていられる。

農機具研究グループの結成

農機具の効率的利用をはかるため、講習会や研究会をグループで行おうとするには、最初発起人が参加しようとする人々を集めてグループの規約、名称、規模などを自主的にきめて結成することが必要である。

農機具の無駄な利用による農家の経済的効果をはかるため、各市町村の部落または旧町村単位ごとに農機具研究グループを結成するよう奨励していられる。

この結成がさげばれた原因は、県でたびたび開催してきた「農機具分解掃除講習会」その他の農機具利用の指導講習会がある特定の地域に限られたこと、受講の立場にある農民の集合が散漫であつたこと、などが実質的効果がわりにあがらず、受入れ母体としての「研究グループ」的集合体をつくらうという声があつたためである。

以下に、農機具研究グループのつくり方や県の指導のしかたなどのあらましを述べてみよう。